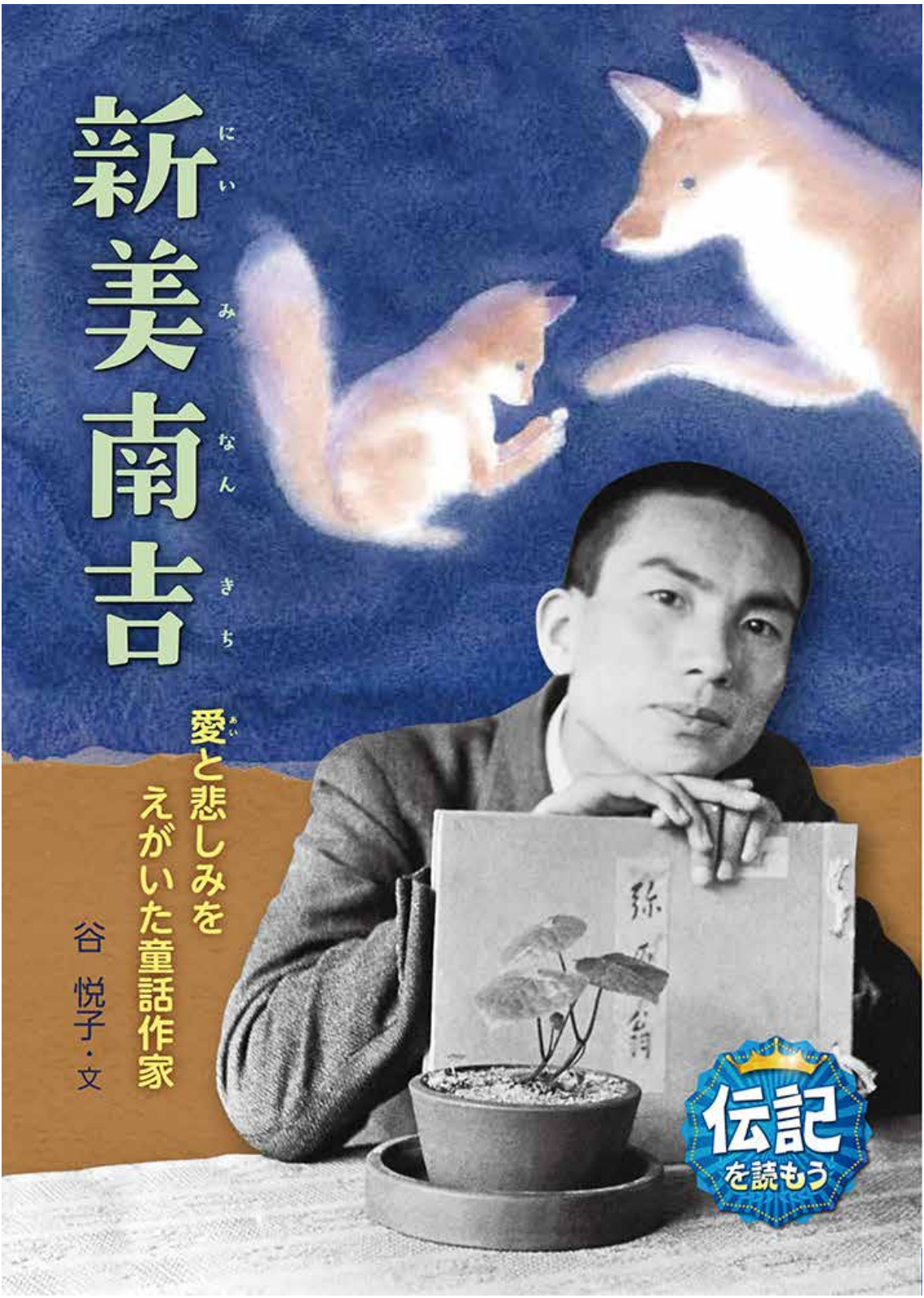
新美南吉

愛と悲しみをえがいた童話作家

谷 悦子・文



伝記を読もう

はじめに……4
一　おかあさんの愛情……7
二　日本のアンデルセンをめざす！……18
三　東京へ、恩人との出会い……31
四　同人誌の計画と幼年童話……43
五　一番つらくて大変だったとき……55
六　女学校の先生になる……67
七　名作が生まれた豊かな自然……78
八　最初の童話集『おじいさんのランプ』……90
九　美しいものを愛する心を……101
十　全集の出版と記念館……112
おわりに……123
資料　南吉をとりまく人びと……128
南吉のゆかりのある場所……130
南吉をもっと知ろう……134
南吉の人生と、生きた時代……136
記念館へ行こう……140

正八は母校の半田第二尋常小学校の代用教員になることができたのです。父多蔵は息子が先生になったことがうれしくて、中折帽子を買ってきて、はじめて勤めに出る日、「かむれかむれ」といいました。正八はちょっとはずかしかったけれど、中折帽子をかぶってさっそうと歩いて行きました。父はそんな姿を見たかったのです。

代用教員は八月までの五か月間でしたが、授業や放課後の遊び、運動会・学芸会・遠足などの行事を通して、実際に子どもたちと交流したことは、正八の創作意欲をかきたてました。たくさんの童謡を作り、自分の作った童話を授業中に語って聞かせたりもしています。

その中に「ごんぎつね」がありました。また学芸会では、「お母さんにはぐれた狸の子の話」の脚本を書いて、クラス全員が劇や歌に出演できるようにしたので、見にきた親たちはとても喜びました。

正八が担任した二年生の中に、中学時代からあこがれていた初恋の女

*代用教員　教員資格をもたない教員。戦前の小学校等では採用されていた。

性、木本咸子の弟がいました。それで、咸子が学芸会を見にきたことがきっかけで、手紙のやりとりやデートをするようになり、ふたりの恋愛が始まりました。

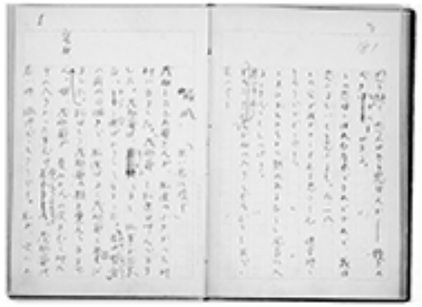
この年の一月、二年ほど休刊していた『赤い鳥』が復刊されました。『赤い鳥』というのは、一九一八（大正七）年七月、作家の鈴木三重吉が子どもたちのために芸術的な童話と童謡を作りたいと思って創刊した児童雑誌です。子どもが読むための雑誌でしたが、表現することも大切だと考えていた三重吉は、子どもが書いた作文と自由詩、大人が書いた童話と童謡の募集をし、読者の投稿欄を設けました。そして応募してきた人たちの中から、作文と童話は鈴木三重吉が、自由詩と童謡は北原白秋が、すぐれた作品を選んで、『赤い鳥』に載せました。それで、当時、童話作家や童謡詩人をめざす若者たちは、熱心に投稿しまし

た。正八もそのひとりでした。

正八が童謡の投稿をはじめると、白秋はすぐにその才能を認めて、一九三一（昭和六）年の『赤い鳥』には、五月号に「窓」、六月号に「ひかる」、七月号に「ひる」と、毎月載るようになりました。童話も八月号に「正坊とクロ」、十一月号に「張紅倫」が載りました。

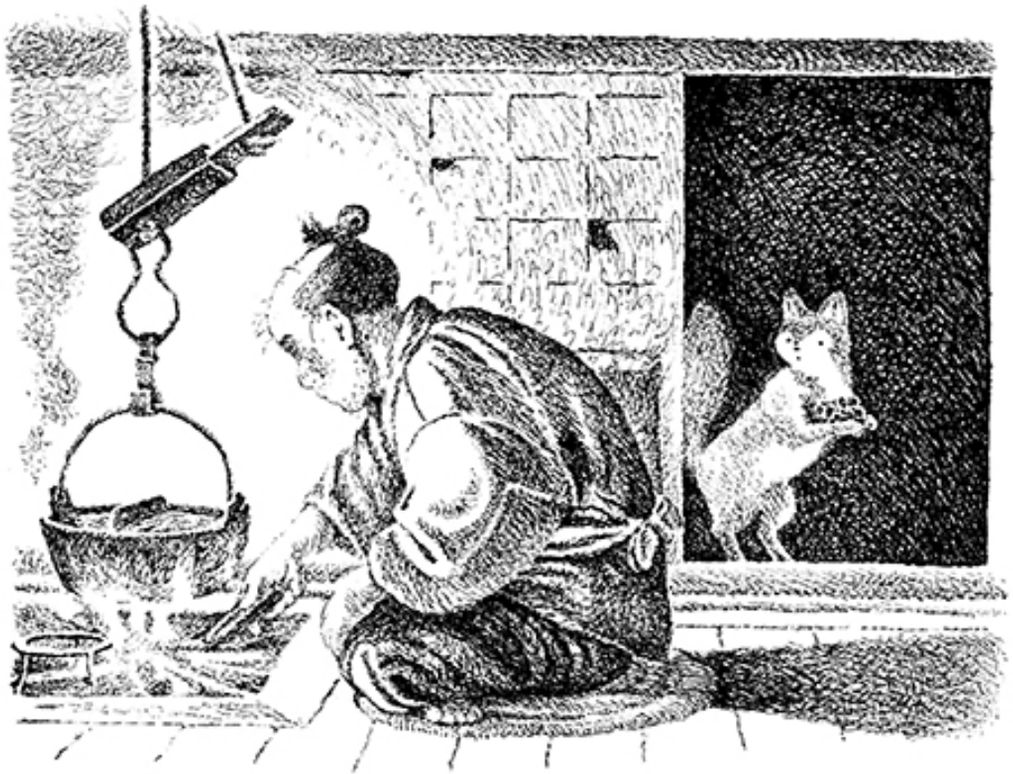
正八はそれまでもいくつかのペンネームを使っていましたが、この『赤い鳥』七月号から、「新美南吉」というペンネームを使いはじめています。正八は「南吉」として本格的にデビューしたのです。ここからは南吉とよぶことにしましょう。

そして一九三二（昭和七）年『赤い鳥』一月号に、新美南吉の「ごん狐」が載ったのです。けれどもこの作品は、南吉が投稿した「権狐」の



「ごん狐」の下書き原稿が書かれているノート

「ごん狐」が掲載された「赤い鳥」の表紙（右）と掲載ページ（上）



原稿とは、ずいぶんちがいます。

鈴木三重吉は、『赤い鳥』に載せる童話は、子どもたちの「作文のお手本」になるような文章であるべきだと考えていました。それで、有名な作家、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」にまで、赤ペンを入れて直したといわれています。ですから無名の十八歳の南吉が書いた文章に対しても、漢字をひらがなにし、むずかしいことばはやさしくし、いらない表現をはぶいてイメージがわきやすいことばを加えました。三重吉によって、「権狐」は、すっきりと整った「ごん狐」になったのです。だからこそ、いまも読み続けられているといえます。

南吉は、「哀しみのある愛の物語」を書きたいと思っていました。その代表作が「ごん狐」です。いじらしくやさしくひたむきなごんの最後は、私たちの心に深く残りますね。「ごん狐」は日本のアンデルセンへの第一歩となったのです。

＊「狐」は小学校で習わない漢字のため、のちに教科書に載ったときはひらがなで「ごんぎつね」になりました。

三　東京へ、恩人との出会い

『赤い鳥』は、経済的な理由で、一九二九（昭和四）年四月から翌年の十二月まで休刊しています。この休刊をはさんで、前を前期『赤い鳥』、後を後期『赤い鳥』といっていますが、休刊前の時期に活躍して白秋から高く評価された詩人に与田準一や巽聖歌がいます。巽聖歌は、宮澤賢治と同じ岩手県の出身で、いまも歌われている「たきび」を作った人です。

南吉は『赤い鳥』復刊後に登場した新人で、聖歌よりも八歳下でした。聖歌は与田準一（赤い鳥社勤務）とともに、白秋を師とあおぐ人たちの童謡同人誌『チチノキ』を発行していました。それで南吉は、